

OG

探訪



今を伝える

発信は一瞬 準備はエンドレス

フリーアナウンサー
曾根純恵さん

全国で約600万世帯と視聴契約を結ぶマーケット・経済専門チャンネル(CS放送)の日経CNBCで、メインキャスターを務める曾根純恵さんは中央大学経済学部の卒業生。刻々と変わる世界情勢をさばき、視聴者へ役立つ情報を伝えている。月曜から金曜までの帯番組『ラップトゥデイ』のほか土日仕事が入る。多忙な曾根キャスターの素顔にアナウンサー志望の学生記者が迫った。

聞き手 学生記者 佐伯綾香(文学部3年)

—『ラップトゥデイ』は毎日午後2時45分から4時20分まで1時間35分の生放送ですね

曾根さん 「東京市場は午後3時に取引を終えます。番組ではきょうのマーケットで何が起こったのか、投資家の動きはきのうからどのように変わったのか。株式市場の情報や経済情報をお届けしています。週末はラジオ番組の収録や、ナレーションの

仕事が入ったり、司会の仕事が入ったりします」

—お忙しいですね

曾根さん 「そうですね。なかなかまとまった休みが取れないですね。でも、お仕事があるというのはありがたいことです。フリーですからね、いつどうなるか…というのもありますしね」

—ラジオも経済情報番組ですか
曾根さん 「『日経ヴェリタス 曾根純恵のナルホドそ〜ね』という番組です。2年目に入りました」

《日経ヴェリタス 日本経済新聞が週1回発行する投資金融情報タブロイド紙、ヴェリタスとはラテン語で真理を意味する。出演中のラジオ局はラジオNIKKEI Podcast。毎週火曜日午後4時45分から》

——ご自身のお名前が付いた番組は凄いことですよ

曾根さん 「ありがたいですね。実は、前任者はテレビ東京の大江麻理子さんでして、『大江麻理子のもやもやトーク』という経済番組でした。大江さんもビデオレターを送ってくださるんですよ」

——好きなアナウンサー女性NO.1という調査結果もありました。大江さんの後任ともなるとプレッシャーもありますよね

曾根さん 「そう！プレッシャーはもちろんあるんですけども、尊敬している方でもあるので、彼女の後を引き継いで、リスナーの方に楽しんでもらえるように頑張ろうと思っています」

——リスナーさんから励ましはありますか

曾根さん 「ありますね。最近は、Twitterなどでもね、いただきます。

励みになりますね。皆さんの声は、もっとこうしよう、ああしようって次につなげていけますから、とても大事にしています。毎回もやもやとした部分を解決して、ナルホドそ～ねとなるよう頑張っています」

きっかけは テレビの募集画面

——アナウンサーを目指すようになったきっかけは

曾根さん 「志望したのは大学1年からですね。本当はミュージカルをやりたいかった。高校生のときに、モデルタレント事務所に所属しておりました。大学に入って、さあミュージカルをやろうと思いましたが、プロの世界でやっていくには大変ではないかと思うところがありまして、その道をあきらめました。でもミュージカルと同じように、声を使った仕事がやりたいって思っていた矢先、付けていたテレビ画面にたまたま『アナウンススクール生募集』という文字を見つけまして。アナウンサーは声を使う！と、応募しました。そしたら選ばれて。周りは就職活動をする3年生が多くて、ひとり1年生の私がその中にまじって。授業を受け持ってくれたアナウンサーの先生方が素晴らしかった、いい人たちでした。アナウンサーの仕事にして

も、いろいろな人にお会いできて、いろいろなことを発信できる。魅力的なお仕事だなあと、目指すようになりました」

——曾根さんも伝達者として、下準備や勉強をしているのですか

曾根さん 「もう日々経済漬けです。経済に毎日触れていますね。資料も読みますし、日経ヴェリタスも読んでいます。番組では専門的な方、知識の深い方をゲストとしてお招きしますので、お話しするときに恥ずかしくないように、失礼に当たらないように、また視聴者の知りたいことを解決したいとの気持ちから、私の方でもしっかりと勉強していこうと思っています」

——どのような1日ですか

曾根さん 「一般紙と日経新聞を読むことから始まります。そのあとインターネットでニュースを見ます。中には“経済ニュースと絡みそうだな”と引っかかる出来事があります。政情が経済に波及することがよくありますものね。まず朝までの世界経済の動きを振り返ります。世界を動かすような会議ではどういったことが話題に上ったのかなあとか、まるで世界各国を旅しているかのようですね。そして午前の取引が始まったら、個別銘柄の株価の動きなどを見て相場の雰囲気を捉えます」

——朝から頭がフル回転ですね

曾根さん 「そうフル回転です。銀行、証券会社、マーケット関係者の方々に電話取材をします。自分の中に引き出しを持っておきたいと思っ



東京証券取引所

——午後から番組が始まる前に、
大変な苦勞ですね

曾根さん 「いえいえ、それがすごく
楽しいんですよ。取材の電話でいろ
んな話をします。マーケットの話はもち
ろんですけど、最近どうですか？

どんなことしているんですか？とか、
他愛もない話をしながら、身近に感じ
ていることを引き出しつつ、今動いて
いるマーケットの話も引き出しつつ、い
ろいろなところから攻めるんです。
ちょっと余談というところからでも、
“あ、これは後で使えるかもしれない”
と広がりもでてきます。多くの方の意
見を聞いて、番組の中で伝えることは
コレかな、こんな話も聞いたけれど、
きょうはコレかなと選び出していく」

——自分で情報収集し、それに対
する考えがないと発言できないで
すもんね

曾根さん 「そ〜う、本当にそうです
よね。だからほんと、テレビでお話しさ
せていただいています。みなさんのお話
をいろいろお聞きしながらのこと
です。取引が終わった後も、新たな
情報がポンポンと上がってくる
ことがあります。世界の動きといいま



すが、日本と実はつながっていること
が多い。まさしく24時間フルタイムで
すね、目が世界に向きます。きょうは
反応がなかったとしても、ゆくゆくまた
それが大きな問題になることもあるの
で、ちゃんと一つひとつ押さえていか
ないと置いていかれてしまいます」

——学生時代から経済に興味があ
ったのですか

曾根さん 「正直言うと、大学に
入ったころは経済の道でアナウン
サーになろうとは思っていなかったん
です。ただ、世界がどんなふうに貿易
などで繋がっているのか興味はあり
ました。それが不思議と繋がって
いくものです。2001年からTBSの
ニュース専門番組『ニュース バード』
で8年間、キャスターとしてお世話
になりました。その途中、4年目ぐら
いのころ、上司に『ステップアップし
たいから、記者的なお仕事をやってみ

《東証アローズ 東京証券取引
所の情報提供スペース。投資家にリ
アルタイムの市場情報を提供する。
2000年に開設された。メディアセン
ターにはマスコミのスタジオがある》

——記者の仕事にも興味があった
のです

曾根さん 「挑戦してみたかった！
自分で書くっていうことに途中から興
味が湧いてきました。アナウンサーと
してニュースを読むことも大変なお仕
事だと思います。事柄が分かってな
いと伝わらない読み方になってしま
う。自分が書くとなるとニュースをも
っと深く理解していないと伝わらな
い。視聴者に伝えるということにお
いて、書く仕事は経験しておいたほう
がいいと思ひまして。実際に自分で書
いて、自分で読むということ全部こ
なすのが、すごく楽しみになっていま
した」

——新たな挑戦で苦勞されたこと
もありましたか

曾根さん 「思っていることがうまく
書けないとか、もっと分かりやすく上
手に書けたらなと思うことがありま
した。当時、原稿の書き方はTBS経済
部の記者の方に教えてもらいました。
みっちり、怒られながら、けんかしな
がら。(笑)今思うとお恥ずかしいです。
怒られたことが今、すごくためにな
っています。あのときの出会いがな
かったならば、多分、今の仕事はし
てないと思いますし、さらに専門
的に経済をやっていくということには
ならなかったと思います。負けず嫌
いなので、向かっていく気持ちで臨
んでいたんだと思います」



刻々と変わる経済情報、世界の出来事が日本に影響する=写真©AFP
カメラマンYOSHIZAKI TSUNO

い、チャンスがあったらぜひやらせてください』とお願ひしました。『曾根君、東証アローズの記者やってみる気はあるかい』って言われて、『ぜひやらせてください!』。そこから経済という分野で専門的にやっていくようになったんです。ね。

——仕事で感じるやりがいとは

曾根さん 「やはり今を伝えているってことですかね。経済は生き物ってよく言いますが、今の経済は、毎日形を変えますからね。経済って、私たちの生活にね、身近なんですよ。番組でも、頭でっかちにならずに、普段の生活で感じていることを発信しながら、皆さんがどうとらえているのかとかお聞きしながら進めるようにしています」

自然に惹かれた
中大キャンパス

——対人関係において気をつけていることはありますか

曾根さん 「お仕事する上ではね、いろんな方と会いますよね。素晴らしい方とも出会います、すごく刺激になって、自分を高めていける関係もあります。一方でなかなかうまくいかないなとも思います。ありますけれども、番組はみんなで作っていくものですから、不安なときは自分からコミュニケーションをとっていこうにしています。好きになるように努力します。人間、良い所悪い所あって普通だと思います。実際に今、嫌いな人はいないですよ」

——経済学部出身ですよ、大学の学びは生かされていると感じますか

曾根さん 「すごく生きています。当時はカタカナが並んで、経済学ってなんだろうと思うところもありましたが、学んでいたから基礎ができた。専門家の方とお話しても、納得できますよね。大学で経済のことを学ばずに、



正門から入ると緑豊かなキャンパスが広がる



学生記者 佐伯綾香

東証アローズのレポートを任されていたらきっと拒否反応が出ていたかと思えます」

——そもそも、なぜ中央大学へ

曾根さん 「暑い夏の日にですね、中央大学を見に行っただですよ。多摩センターからバスに乗って大学に向かうと正門前に到着。そこから坂道を上って、左手には校舎が、右側には桜広場が見えた。雰囲気が本当によかった。大きなキャンパスなのに緑に囲まれて、いいところだなあ、と。鳥取の米子に7年間住んでいました。笹舟みたいなものを自分で作って川に流して遊ぶといった感じで自然に親しんできました。高校時代は再び横浜に戻って過ごしました。そこで何か物足りないと感じていたから、中大の自然のなかのキャンパスに惹

かれたのでしょね」

——多摩センターからモノレールではなく、バスですか

曾根さん 「当時はモノレールがなくて。卒業式を迎える年明けぐらいにできました」

《多摩都市モノレールの全区間開通は、2000年1月10日だった》

小さな楽しみが
大きなやすらぎに

——リラックス方法は何ですか

曾根さん 「大きく深呼吸することですかね。それで体を上下に揺らしたり、たまにはジャンプをしたり、ラジオ体操をしたりして、ほぐして。あとは胸に手を当ててフーって呼吸を整えて心を整える。気分転換にいい香りをかいだりもします。その時々で好きな香りって変わりますが、ローズ、ラベンダー、フランキンセンスも好きです」

《フランキンセンス 名前の由来は中世のフランス語、本当の香り、質の高い薫香を意味する》

もっと知りたい

■ホームカミングデー

曾根さんは、恒例の中大ホームカミングデーの司会を担当している。ことしの開催は10月26日(日)。卒業生を多摩キャンパスに招待して、イベントや模擬店などで一日たっぷり楽しんでいただく。毎年、親子三代(直系)の中大卒業生、在校生を表彰する。

◆取材を終えて～学生記者～◆

私もいつかは

中央大学の先輩で、アナウンサーとして活躍されている、しかも生放送のテレビ番組で経済ニュースをさばっている。今回の企画を知り、曾根純恵さんについて調べていくうちに、ぜひ直接お会いしたいという気持ちが高まった。

取材当日、青空のもと、私はかつて中央大学があった場所近くにある中大駿河台記念館へ向かった。JR御茶ノ水駅で下車、坂道を降りると、立派な木製の門がずっしりと構えていた。初訪問だった。

記念館の玄関で私は、緊張と期待で心をいっぱいにして、曾根さんを待った。



「少し遅れちゃってごめんなさいね」

白のジャケットに白のスカート、髪の毛をスッキリとまとめた女性が現れた。曾根純恵さんだ。

初めましてから話は始まり、仕事の話、プライベートの話、学生時代の話など話題は多岐にわたった。

曾根さんの声は温かみがあり、透き通るようだ。話し方はいきなり聞き惚れてしまうほど丁寧。一言一言を大切にしていることが自然と伝わってきた。

話すにつれて、次第に心の内を話してくださるようになった。気付けば1時間、あっという間に取材の時間は過ぎてしまった。

相手の目をしっかりと見て、相手の話を聞く。納得したり驚いたり…、自分の感情を素直に表現する。出会った人の心にすっと溶け込むように入り込み、相手の緊張をもほぐしてしまう。

曾根さんの魅力は、その親近感と相手を大切にするという姿勢、そして柔らかな雰囲気の中にも、心に秘める芯の強さだと感じた。

同じ多摩キャンパスに通った先輩がこのように活躍されていることは、とても心強い。私自身もいつかこうして後輩に話ができるような、大学に恩返しができるような、そんな素敵な女性になりたいと心から思った。
(佐伯綾香)



中大駿河台記念館エントランス